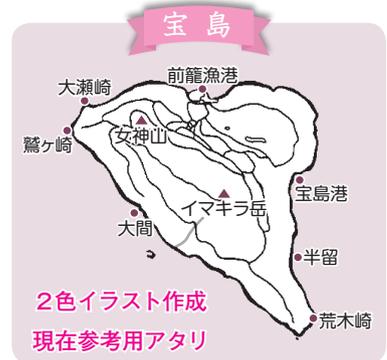


表 ミチコさんの情報

身体機能	右麻痺あり		
	感覚障害あり	・右上下肢に軽度鈍麻あり	
嚥下障害なし		・糖尿病食1400kcalの軟飯 ・一口大 ・汁物とろみ(麺類の時の汁にはとろみはつけない)	
	高次脳機能障害なし	・日中、時々不機嫌な時があり、暴言が出ることもある。本人も解っており「頭に血が上りやすい」という ・職員を選ぶ・子供たちや親せきに頻回に電話をかける ・好き嫌いが多い ・納豆・山手・アサリ・トマト・ところてん・もずく・牛乳・トマト・牛肉が嫌い ・ピンの岩のりを一気に食べてしまう	
歩行レベル	歩行不可		
車いす操作	自立		
ベッド上基本動作	寝返り半介助	起居一部介助	
	座位保持要観察	移乗一部介助	
ADL	食事要観察	整容自立	入浴全介助
	更衣一部介助	協力動作あり	
	排泄一部介助	・下衣更衣上げ下げ介助 ・洋式トイレ・手すり使用	
	尿意あり 便意あり	・便失禁時々あり ・日中レギュラーパッド、夜間おむつ着用	

「島に帰りたい」
ミチコさんはそう言われました。そしてご本人以上に娘さんたちは「島に帰ってきてほしい」と願っておられました。しかし、帰りたい、帰ってきてほしいと思ってもそ

宝島生まれのミチコさん



んな簡単に車でちよつと、という場所ではありません。そのみんなの心の中にある島は「宝島」。鹿児島市から南に約330キロ。フェリーで片道13時間かけてやつと辿り着きます。週2便しか運航しないそのフェリーは、海が時化るともちろん出航できません。すると、人も動けない、食べ物も届かない状況になります。人口100人余り。ファミ

レスもコンビニも居酒屋も病院も警察署も信号機もありません。宝島はトカラ列島の有人島では南端の島で、その名のとおり、昔イギリスの海賊、キャプテンキッドが財宝を隠したという言い伝えがある鍾乳洞もあります。ないないづくしの島の暮しは不便なこともあります。生まれた育った地域、住み慣れた島には馴染みの人たちがいます。宝島には

認知症の人が 最期まで「生ききる」暮らしの支え方 +7+

車いすで帰ってきた ミチコさん

1



宝島で生まれ育ったミチコさん。島外の施設で暮らしていましたが、宝島に戻ってくることになりました。

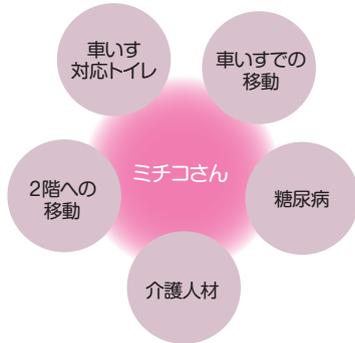
文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

人の温もり、大切なつながりがあるからこそ、ミチコさんは「帰りたい」と思うし、ご家族は「帰ってきてほしい」と思うのです。

宝島出身のミチコさんは、その時82歳。要介護2、脳梗塞後遺症・糖尿病・高血圧症があります。平成16年鹿児島市内の病院に入院、リハビリ治療をしていました。その後、同じく市内の老健に入所され、リハビリ継続を行っていましたが、血糖値が高値となり平成20年7月血糖値コントロールのため、入院されました。その後、系列の老健施設に入所。その老健の入所が長期になり、平成21年4月、同市内の別老健に転所。その後、その施設でこれまで過ごされました。島を離れて5年以上が経ちます。

その当時の施設からの情報は表のとおりでした。老健には2年近く入所していることから退所を勧められていて、行く先を探していたところでした。身寄りは、小宝島在住の長男と次女、宝島在住の長女の3人。長女が、私たちの事業所・小規模多機能ホームたから(以下、たから)のスタッフでもありました。私は「やつと宝島にも

できないこと中心の視点(不安要素)



とにかく要介護状態の方を島で受け入れることが前代未聞のことでした。できないこと、やりにくい要素だけに目を向けると島

ストレスの視点

介護事業所ができたのだから、他の施設に行くんじゃないかと宝島に戻ってきませんか?とお伝えしました。しかし、長く病院や施設で過ごされ、そして病气もあり車いすですぐに日常生活を送っておられる方が、島に帰るにはたくさん課題や不安がありました。役場の保健師からは、車いすですぐに糖尿病、島の生活環境も整わないことから、島での生活は無理ではないかと言われました。老健の方からも「大変でしょうから、一日行かれてすぐに帰ってこられても良いですよ」と言われました。

実践でどんどん変わる

民の方々の不安や役場や施設の方々のおつしやることは当然のことだつたと思います。ミチコさんの「帰りたい」という気持ちをどうのうにすれば実現できるかをみんなで考えました。できないことを考えると「やっぱり島には戻ることはできないね」と捉えがちですが、できることに視点を向けること、あるものをどのように活用できるかを考えることは、離島に限らずどんな場所でも必要な視点ではないかと学びました。

① 家族と老健との調整

これまで家族が施設の方とお話をされていましたが、私たちが立ち会い、島へ帰る日時の決定や準備、もし島での生活ができなかった時の鹿児島市内の施設の受け入れの確認や調整を行いました。そうして、ご家族の不安も少しずつ解消されていったように思われました。

② 事業所にて受け入れ

当然、電動ベッドなどはありませんし、購入できませんでしたが、鹿児島島本土のホームセンター

でパイプベッドを購入し、宝島に送りました。そして、パイプいすを荷造りひもでベッドに括り付け、手すり代わりにしました。当時は、住民センターの二室をお借りして事業を行っていたので、専用トイレがなく、役場の方が倉庫を整理して手すりもつけてください、ミチコさん専用のトイレを準備してくださいました。

また、お風呂もありませんでしたので、自治会長に相談すると、島内にある唯一の共同温泉でミチコさん専用時間を設けてください、そのことを住民放送で皆さんに告知してくださいだったので、それまで公共の場は全員で使うもの、特別扱いを嫌い、例外を許さない地域でしたが、ミチコさんのためにルールを変更してくれたのです。一方で、特別な配慮をしたことに不愉快な思いをしている住民の方もいましたが、その方に対して、「みんなが理解し、助け合わないとミチコさんは風呂に入れないだろう」と諭す場面もみられました。

私たちの思い込み?

私たちはミチコさんにかかわる

中で、自分たちがどれだけ「思い込み」に縛られていたか気づかされました。ミチコさんはわがままではないし、すごく穏やかな性格でした。また不機嫌になつてトラブルを起すこともありません。失禁もありません。「ビンの岩のりを一気に食べてしまう」なんてこともありません。施設での情報で私たちはすっかり思い込みでミチコさんを見てしまっていたのです。

ミチコさんがたからに来てから、たくさんの方が事業所に来るようになりました。海で取れた魚をミチコさん持ってきてくれる方もいました。一緒に食事をするために来てくれる方もいました。隣の小宝島からも娘さん、孫やひ孫もやってきました。まさにミチコさんが、人と人をつなぐ役になりました。そして、車いすで帰ってきたミチコさんは入院でも療養でもなく、車いすですぐに地域の普通の暮らしを始めたのです。

そして、3年の月日が流れました。現在、ミチコさんは……。

次号につづく